

10) 大腸結核症に合併した大腸癌の2例

山口 正康・渡辺 英伸 (新潟大学第一)
病理
鈴木 力・武藤 輝一 (同 第一外科)

症例 1. 70歳女性。発熱，右下腹部痛を主訴に来院。回盲部は約 5cm にわたり著明に狭窄し，全周性腫瘤性肥厚を示し，表面は不整結節像を認めた。癌の組織型は高分化型腺癌であった。癌周囲の粘膜下層及び固有筋層内には非乾酪性肉芽腫が散在し，Ziehl-Neelsen 染色にて結核菌を証明した。

症例 2. 62歳，女性。主訴，右下腹部痛。Bauhin 弁直上に，中央に陥凹を有し全周性の狭窄を伴う Borr 3 型の大腸癌を認めた。しかし肉眼的には癌の範囲は不明瞭であった。上行結腸には多発する潰瘍萎縮痕帯と粘膜集中を認めた。癌は結核痕帯に囲まれ，組織学的には粘液産生を伴う中分化型腺癌であった。

腸結核に合併する大腸癌の肉眼的特徴は，通常見られる大腸癌の形とは異なり，本症例にみられる特徴を呈する例が多く，癌の組織型も粘液産生を伴う高分化型腺癌が多い。

11) 短腸症候群の経過中に発症した Vit E 欠乏による sensory polyneuropathy の1例

山寺 陽一・酒井 靖夫 (新潟大学第一)
島山 勝義・小山 真 (外科)
武藤 輝一
中島 孝・田中 恵子 (同 神経内科)
宮武 正

症例は44才男性。某医で malrotation による腸捻転の診断にて小腸広範切除，空腸横行結腸瘻造設術施行された。術後両下肢のしびれ感出現し，当科で空腸横行結腸吻合術施行後も改善しなかったため当院神経内科に入院した。神経学的所見としては，両下肢の表在感覚障害，アキレス腱反射消失を認めたが，深部感覚障害，小脳性失調は認めなかった。血清及び赤血球の Vit E が著明に低下していた事，腓腹神経生検で高度の有髄神経線維の脱落を認めた事より Vit E 欠乏による sensory polyneuropathy と診断され，Vit E 大量療法の結果両下肢の表在感覚障害は著明に改善された。以上比較的稀な Vit E 欠乏による sensory polyneuropathy の1例を若干の文献的考察を加えて報告した。

12) 郵政職員 885名の肝機能検査成績と飲酒に関する検討 (第1報)

藤田 初子・斉藤真利子 (新潟通信病院)
寺尾 信子・尾崎 信紘 (健康管理科)
島山 重秋・須田 陽子 (同 内科)

郵政職員 885名の肝機能検査成績 (GOT, GPT, γ -GTP) と飲酒に関する検討を実施し，以下の知見を得た。

1) 飲酒量が増加する程，休肝日が減少する程 (飲酒頻度が増す程) 異常率は高値であった。飲酒量 2合を超える群は 2合以内群，休肝日 (-) 群は 2回群より，異常者が有意に多かった。以上の結果より，飲酒量は日本酒にして 2合/日 (自己申告) 以内，休肝日は多い程よいが，少なくとも 2回/週以上が適切と思われる。

2) γ -GTP を経時的に検討すると，多くの症例で上昇が認められ，適切な飲酒指導を要すると思われた。

3) 肝機能検査異常率には地域差が認められ，今後の検討が求められる。

13) フラジオマイシンによる薬剤性肝障害の1症例

小黒 仁・豊島 宗厚 (南部郷総合病院)
酒井 一也 (内科)
前田 裕伸・柴崎 浩一 (日本歯科大新潟
歯学部内科)
野本 実・市田 文弘 (新潟大学第三
内科)

33才女性の膈炎に際し投与したフラジオマイシン膈炎が原因と考えられた薬剤性肝障害について報告する。S 61年 8月 2日よりフラジオマイシン 20mg 含有膈剤 1日 1T, 6日間投与後 9日目に発熱，食思不振，全身倦怠感出現。近医受診し肝障害指摘され当院紹介入院。血液検査にて好酸球増多，GPT 優位の高トランスアミナーゼ血症 (GPT 438IU/L, T.Bil, 2.0mg/dl), 肝生検にて Acute hepatitis の所見を得た。9月 6日，偶然の再投与にて翌日より同様の臨床経過を示し本剤が原因と考えた。LMIT にて，フラジオマイシン陽性。フラジオマイシンによる薬剤性肝障害と確診した。

14) サイトメガロウイルス肝炎の1成人例

山内 豊明・斉藤 敦 (信楽園病院内科)
塚田 芳久・村山 久夫

症例: 31歳，男。既往歴，家族歴特になし。感冒様症状にて来院。末血リンパ球 55%，異型リンパ球 2%，GOT 184, GPT 183, γ -GTP 454 と異常を認め，HA 抗体，HBs 抗原は共に陰性であった。発熱，肝機能異

常は約3週間持続し、それらの改善と同時にサイトメガロウイルス（以下 CMV）抗体価の上昇を認め、IgG CMV 抗体 1+、IgM CMV 抗体 4+（ELISA）で、肝生検にて肝炎所見を認め、CMV の初感染による肝炎と診断した。

CMV 感染症は、新生児・幼児に多く見られ、欧米と異なり成人における本症は比較的稀であり本邦の成人例のほとんどは、免疫抑制剤使用時や重症時などの免疫能低下時及び大量輸血後などの報告である。

15) 頸椎骨転移を初発症状とし、二次性 Budd-Chiari 症候群、右房内増殖を示した肝細胞癌の1例

吉田 俊明・横田 剛 (新潟大学第三)
富樫 満・上村 朝輝 (内科)
市田 文弘

症例は55歳男性。昭和60年10月より左肩、左上腕に疼痛出現。61年3月、肝細胞癌の骨転移の診断で本学整形外科にてV、VI頸椎骨腫瘍の部分切除および左椎弓根切除術を受けた。4月、原発巣の治療を目的に当科に転科した。HBs 抗原陽性。AFP 28,000ng/ml。肝は正中線臍上3横指。画像診断では右葉全体を占める多結節性の腫瘍を認めた。肝の腫瘍は抗癌剤の動注と2回のTAEにて一時的に縮小を示したが、再度増大した。経過中に頸椎骨転移巣の再発と腸骨への転移を認め、放射線療法を施行し疼痛の軽減をみた。また、末期には肝静脈から右房に及ぶ腫瘍塞栓により腹壁皮下静脈の怒脹と難治性の腹水、下腿浮腫が出現した。62年1月死亡。剖検では乙型肝炎変性に合併した肝細胞癌で、門脈本幹、肝静脈、下大静脈、右房腔の腫瘍塞栓と両肺、右房、横隔膜、脾、肋骨、腸骨、胸膜、リンパ節の転移を確認した。

16) 食道静脈瘤止血困難症例に対する Combined Therapy

高木健太郎・清水 武昭 (信楽園病院外科)
塚田 芳久 (同 内科)
吉田 奎介・塚田 一博 (新潟大学第一)
加藤 英雄 (外科)

過去10年間に当科で経験した食道静脈瘤症例は72例で、そのうち止血困難であった8例につきその治療法と予後について検討した。

対象症例の平均年齢は53.8才、男性4例、女性4例、肝硬変症5例、IPH 3例であった。合併疾患を有するものは4例で、胃癌2例、血友病A 1例、真性多血症1例であった。手術歴を有するものは2例で、いずれも胃全摘術後であった。全例が出血歴を有し、内視鏡所見では

全例 RCsign (+) で、Lg (+) は3例であった。

全例に内視鏡的硬化療法と手術を施行した。硬化療法の回数は1~7回であった。手術のうちわけは Hassab 手術4例、shunt 手術3例、胃上部切除術1例であった。全例止血しえたが、2例肝不全死し、他の6例は社会復帰している。

結語 肝予備能不良例、他の合併疾患を有する例、胃全摘術後例で内視鏡的硬化療法にて止血困難な症例には、Hassab 手術、胃上部切除術、shunt 手術を追加する combined therapy が有効であった。

17) 特異な経過をとった総胆管結石症の1例

土田 正則・新田 恵也 (村上病院外科)
村山 裕一・清水 春夫

症例は80歳男性で上腹部痛、発熱にて来院、血液検査及び超音波検査にて胆管結石にともなった急性膵炎と診断したが、4日後には症状の消失にともない肝外性の嚢胞を認めた。これは総胆管結石が嵌頓したために肝外側区域枝が破裂し、胆汁が漏出し嚢胞が形成されたものと診断し、ERCPにより胆管と嚢胞の交通を確認し手術を行った。文献的には肝臓の外傷や手術、PTCなどの外科的操作の後に漏出した胆汁が希に腹腔内に広がらず胆汁性の嚢胞が形成されることが報告されている。1979年 Gould, Patelはこの様な肝外性の嚢胞を Biloma としているが、この概念に当てはまる症例を検索すると29例であり、そのほとんどが外傷、PTC後に発生しており、これ以外の原因で発生したものは Zegelらによる胆嚢癌の胆嚢穿孔と石橋らによる胆管癌の左肝内胆管破裂の2例のみであった。総胆管結石に合併した胆汁性嚢胞の報告はなく、本症例は極めて希な症例である。

18) 経皮的胆管ドレナージの一次的内瘻化について

斎藤 英樹・丸田 宥吉 (新潟市民病院 第一外科)
何 汝朝 (同 消化器科)

PTCD チューブの内瘻化は通常 PTCD 施行後胆汁うっ滞が改善される一週間以後に行なわれるが、我々は PTCD に引き続いて内瘻化を行なうことを試み、これを一次的内瘻化と呼んでいる。一次的内瘻化の目的は (1) PTCD チューブの胆管外逸脱の予防、(2) 腸肝循環の早期改善、(3) 胆管閉塞の範囲の診断である。使用する内瘻化チューブは HANAKO の 7FrPTCD 留置チューブに先端から 1cm 間隔にラセン形に直径約 1mm の側孔を9個つけたものである。昭和60年1月から昭和